

## 留学・研究計画書

氏 名 関本紀子	留学機関名 ハノイ国家大学ベトナム学・科学発展院
留学先国名 ベトナム	留学期間 西暦 2007年10月～2008年9月
研究テーマ 仏領インドシナにおける交通・物流網の形成と地域構造の変容—保護領トンキン・アンナンおよび直轄領コーチシナの相互間関係を中心に—	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>現在までの仏領インドシナ研究においては、各分野ともに対象地域が統治上分断された行政区画による地域区分に依拠するにとどまり、それらの枠を超え、人々の社会・経済活動から自然発生的に生じる「地域」「流通圏」「経済圏」およびその相互関係、重層的構成に着目した研究は管見の所まだない。交通研究に関しても数が少ないだけでなく、インフラ基盤の拡張・改善過程の考察がみられるのみで、代表的なファン・ヴァン・リエンの研究『ベトナム交通運輸 1858-1957年』（ベトナム語）も同様である。欧米では植民地期のインドシナ鉄道について David Willson Del Testa の博士論文“Labor, nationalism, and the railroads in French Colonial Indochina, 1898-1945”があるが、鉄道労働者の反仏運動が主なテーマであり、輸送事業、商品流通の実態や交通網の拡大に伴う社会・経済の変容については、具体的な史料や事例をもとに十分に検討されていない。本研究は、フランス植民地期ベトナムにおける交通・物流網の形成を、商品流通や時間距離の変遷および物価変動という視点を導入して分析し、これらの結果を総合的に検討することによって、行政区画にとらわれない「地域」の構造及び多様性を明らかにすることを目指す。本研究では、以下の3つのアプローチを考えている。</p> <p>(1) インドシナの捉え方：統治上分割された行政区画の境界を一度外し、ヒト・モノの行き来に着目して、実際の社会・経済活動上ひとつのまとまりとして存在していた「地域」を明らかにすることを通じて、インドシナを再構築する。</p> <p>(2) 地域の捉え方：地域が規定される要因として①自然的条件、②歴史的条件、③社会・経済的条件が考えられるが、本研究では③を最も重要な視点としてこれらの要因を検討することに力点を置く。その手段として交通網の整備、商品流通、時間距離、物価などの要素を取り入れ分析していく。</p> <p>(3) 「地域」の比較研究：時間軸および空間の比較、つまり①植民地期以前の「地域」構造との比較および②植民地期の各「地域」間の比較を行ないたい。①は、フランス植民地行政が線引きを行なう前の「地域」の形成状況を明らかにすることで、植民地期に統治上分断され、関税や法体系の違いなどからある程度自由な行き来が制限された後に、新たに形成された「地域」への理解がより深まると考えるからである。また、②については、商品流通や物価といった特定のテーマを通じて各「地域」の特徴を比較検討することで、インドシナの多様性や相違点を浮き彫りに出来ると考えるからである。</p> <p>本研究では、一次資料に加え、旅行記、視察記、報告書といった同時代史料の中の記述も含めた丹念な事例の発掘も行い、上記3つの総合の上に立って、まず植民地期ベトナム上に形成されていた「地域」とその特徴、相互関係を中心に分析、検証し、最終的には言語・文化の異なる5つの地域を包含していた仏領インドシナ上の「地域」の理解に、新たな視点の提示を試みたい。</p>	

# 成果報告書

記入日 2009年 10月 3日

氏名 関本 紀子	留学先国名 ベトナム	所属機関 東京外国語大学大学院地域文化研究科
研究テーマ：仏領インドシナにおける交通・物流網の形成と地域構造の変容－保護領トンキン・アンナンおよび直轄領コーチシナの相互間関係を中心に－		
留学期間：2007年10月～2009年9月（奨学金支給期間は2007年10月から1年間であるが、その後私費留学として1年間延長した。本報告書は私費留学期間も含め2009年9月までの2年間の成果を含む。）		
<p>1. 研究活動報告：本研究の課題は、行政区画の枠を超え、仏領期ベトナムにおいて人々の社会・経済活動から生じる「地域（圏）」とその相互関係を明らかにすることである。この課題を検証・分析するため必要となる史料・文献調査と収集が主なる目的であった。以下にその活動状況を調査地毎に報告する。</p> <p>(1) ハノイ調査：主にフランス植民地期ベトナム全領域に関する資料が保管されているベトナム国家第一文書館では、今回の留学で主要な課題であった中部・南部に関しての「各省月別公設市場価格表」の閲覧・収集のみならず、物価分析と共通文化圏の検討に重要な度量衡についても多くの史料を発掘することができた。度量衡は社会経済研究の基礎であるにも関わらず、研究がほとんど進んでいない。一次資料の未発掘に加えて、既存文献史料も断片的かつ不整合であるため、統一的見解の表出が困難であるからである。今回収集できた一連の史料群は、インドシナ総督府、トンキン理事長官、各省という3つの行政レベルで、度量衡政策の進展と各省における運用の実態、統一が実現できなかった背景を、植民地期前・中・後期という時系列変化を通じて総合的に検討することを可能とする、大変貴重なものである。その他植民地期に発行された官製年報、年次報告書、定期刊行物や文献は、第一文書館、国家図書館、社会科学通信院図書室において、また、植民地期に併存していた阮朝に関する漢籍資料（法令集『大南会典事例続編』など）は、漢喃研究院および史学院図書室で閲覧・収集した。</p> <p>(2) ホーチミン調査：2008年8月24日-10月3日の内2週間（各種手続きの待ち時間が数週間を要するため、その間はハノイに戻り文献調査を継続した）、中南部の史料を所蔵している国家第2文書館で、主に交通関係の史料所蔵調査及び閲覧を行った。植民地期南部（コーチシナ）に関しては、特に水運に関して史料を発掘することができたが、中部（アンナン）の史料は2007年12月に中部高原都市ダラットに国家第4文書館が新設され、そちらに移管されたばかりで見ることができなかった。第2文書館では、以前から交流のあるアメリカとフランスの大学院生と偶然の再会を果たせ、彼らの紹介で他の外国人研究者の方とも情報交換をすることができた。特に新設されたダラットの文書館に関しては、第1、第2文書館スタッフも概要を把握しておらず、実際に利用経験のある研究者の方から色々ご教示いただけたことは大変有意義であった。その情報のおかげもあって、約1ヶ月後にはダラット調査も実現させることができた。ホーチミンでは科学総合図書館でも文献調査を行い、首都ハノイの国家図書館では所蔵されていない中南部研究機関発行の雑誌・文献を閲覧することができた。</p>		

(3) **ダラット調査** (2008年10月28日-11月18日) : ホーチミン調査を受けて、今回日本人で初めて国家第4文書館での調査が実現した。この文書館はベトナム共和国初代大統領ゴ・ディン・ジエムの実弟で、大統領顧問を務めたゴ・ディン・ニュー夫人、チャン・レ・スアン (ジエム政権に反対して焼身自殺を図った僧侶を「人間バーベキュー」と発言し、世界中から非難を浴びたマダヌ・ヌー) の別荘地跡に建てられており、同敷地内には文書館として使用されている建物の他に、3つの別荘が残されている。それぞれ博物館、スタッフ用住居として改装・修復され、敷地内の日本庭園やプール、売店なども含め、観光地として一般の旅行者などにも公開されているという、変わった特色を持つ文書館である。ここではアンナン理事長官府コレクション中、物価、交通 (水運、陸運、鉄道) だけでなく、移出入人口統計という興味深い史料も発掘することができた。しかし同コレクションはタイトル数が全部で4174と第1、第2文書館が所蔵している他のコレクションと比較しても格段に少なく、体系的な史料群というよりは断片的な情報が集められるに留まった。また、開館して日が浅く閲覧者数も依然として少ないためか、閲覧許可、閲覧申請から複写にいたるまで、様々な困難に直面した。他の文書館での文献調査経験の蓄積があったため、幸い冷静に対応することができたが、短期であるにもかかわらずかなりの精神的負担を強いられた調査であった。しかし、第4文書館での閲覧経験者が少ない現段階で調査を実現させ、現状を把握できたことは大変貴重な経験であった。

(4) **フエ調査** (2008年2月19日-27日) : 東洋大学末成道男先生、ベトナム宗教研究院客員研究員大西和彦先生の調査に同行させていただき、中部研究機関所属のベトナム人研究者の方から本研究課題に対する先行研究や認識を伺う機会を得ることができた。お話を伺ったのはフエでは文化通信研究院フエ分院院長、王宮歴史博物館前館長、フエ大学歴史学部学部長、フエ遺跡保存委員会副所長と、中部における歴史・文化研究の第一人者と称される方ばかりであり、今後中南部へと研究対象を広げていく関係上非常に貴重な機会であった。それぞれの先生方も本研究課題に高い関心を示して下さい、今後の研究協力も約束して下さった。その後もメールなどで連絡をいただいている。またフエでは今日でも特殊な度量衡を使用している職種 (大工、漢方薬調合士など) の方々にも実際に度量衡に関する聞き取り調査も行い、フィールド調査の難しさを実感すると同時に、文献資料だけでは得られない五感を通じての研究対象との接近に想像力かき立てられ、分析の幅が広げられたように思う。

## 2. 研究成果発表状況

(1) **口頭発表** : 2008年12月4日-7日にかけて第3回ベトナム学国際会議 (参加者約900名、発表者数531名、内外国人発表者174名) が開催され、発表する機会を得られた。この会議では最終日第2セッション (近代史) において、第一文書館で得られた度量衡に関する各省理事の書簡および報告書を通じて北部ベトナムの地域性について検討した成果の一部をベトナム語で発表した (タイトル「植民地期北部ベトナムにおける度量衡の統一とその実態」)。発表後、何人かの研究者の方と休憩時間にご意見や感想を、また植民地期の租税研究を行っている研究者の方からは有益なコメントをいただくことができた。後日この研究者の方のご自宅に招待され、史料を見ながらの意見交換を通じて、現段階でのベトナム人研究者による度量衡研究の進展状況や認識も確認することができた。この会議では日本人研究者も40名以上参加しており、幅広く人脈が広げられたことも成果のひとつであった。

(2) **論文・研究ノート** : 上記国際会議で発表した内容のフルペーパー「植民地期北部ベトナムにおける度

量衡の統一とその実態 (A4 サイズ 22 枚ベトナム語)」は、同会議紀要 CDROM に収録されており、2010 年には世界出版社から刊行予定である。また、ベトナムの各国家文書館は、ベトナム研究において重要な史料を大量に所蔵しているにもかかわらず、情報の不足や利用方法の複雑さから外国人閲覧者が依然少ない状況にある。そこで、日本人で初めて植民地期史料を保有している機関すべてを利用できた経験を生かして「植民地期ベトナム文献資料所蔵機関案内」(『ベトナムの社会と文化』9 号 2009 年採録決定済み)にまとめた。この中では、各文書館の利用案内や所蔵文献の概要紹介に加えて、各文書館が発行した目録や案内からだけでは不十分な情報(近年における変更点、各手続きの現状、閲覧して判明した問題点やその解決方法など)を補足し、ベトナム研究の貴重な史料群の活用に道を開くことを試みた。

**3. 総括—得られた研究成果と今後の方向性—**：留学を通じて得られた大きな成果は、以下の 2 点である。

第一に、研究課題へのアプローチ法の見直しである。研究テーマに掲げたように、これまでは行政区画にとらわれない「地域」の形成と発展を交通・物流を通してとらえ、その検証に物価変動や共通文化圏(統一的度量衡、通貨の使用範囲など)の伸張に着目して行うという、2 段階のアプローチを考えていた。しかし、交通もまた社会経済構成要素の一部であり、交通のみを主軸として理解しようとするとは本来の「地域」の姿が正しくとらえられない可能性がある。また、交通のみならず、物価、度量衡、通貨といった分野についても、「地域」の形成を論じるに十分な一次資料の発掘に成功した。以上から、「地域」の把握と相互関係を明らかにするため、交通、流通、物価、度量衡、通貨など、社会経済活動上重要な分野を選定し、考察の座標を明確にし、それらを総合的に検討する、というアプローチに修正した。

第二に、今後の研究の大きな指針を得られた点である。本研究は、植民地期ベトナム全体と広範な地域を対象としているため、単なる一般論や動向分析を超え、いかに独自の研究手法を確立し、学術的価値を高められるかは難しい課題であった。しかし 2 年間の調査を通じて得られた歴大な貴重史料群をもとに、今後の大きな指針を得ることができた。本研究は一国の動態を研究することを目的としているが、社会経済の基本指標を使用し、その分析手法を全国でも行政区画による地域でもなく、各省レベルでの詳細な検討を通じての把握を目指す。仏領インドシナに関しては現在に至っても、物価のような基本指標すら一次資料の未発掘のため明らかにされていないが、これまでの長期調査の結果、相互間の比較・検討に十分耐えうる体系的で同質性の高い大量の基本指標の収集に成功した。これらに依拠することで、客観性を維持しながら合理的な結論を導き出すことは可能であると考えられる。そのため、本研究は最末端から国家までを通じて、社会、経済、植民統治の問題を解明する筋道となる。また交通・物流のみならず、物価、度量衡、通貨と行った社会経済史の基本分野に対して、初めて実証的な分析を実現させることができ、その資料提示においても幅広い各分野の研究に貢献できる。また、これら考察の座標として取り上げた分野は、互いに比較・検討することで本研究の課題がより鮮明になるだけでなく、既存研究においてのそれぞれの地域や分野を相対化する視点にもつながる。ベトナムの地域研究は、各分野、時代ともに優れた研究の蓄積がある。しかし一方で、一部地域を対象とした定点観察やフィールド調査が多く、地域研究の基盤となる社会・経済の主要な分野に関しても、十分な文献・史料発掘がすすめられていない現状がある。本研究は、こうした優れたミクロ的視点の研究・調査の蓄積に、マクロ的視点を導入することができ、今後もこれら両視点での研究を連携していくことで、全体的・総合的なベトナム

地域の理解につなげることができると考えている。

上記に掲げた今後の研究の大きな指針は、煩雑で時間を要するベトナムの各文書館において長期的・継続的な調査が実現できた結果、初めて得ることが可能となったものである。また史料の収集だけでなく、現在の研究動向やその中での本研究の位置づけを、ベトナム人研究者を含む内外の幅広い研究者との情報・意見交換を通じて相対的に把握できたことも大きな成果であり、今後自信を持って研究を進められる。また、度量衡という重要な基礎研究を独自の研究手法と豊富な史料群をもって、別途独立した研究へと発展させられる方向性も見えてきた。このような機会を与えていただいた松下国際財団に、心からの感謝を申し上げます。

**4. 生活状況：**今回の留学は父のベトナム駐在と時期が重なり、今までの留学とは一味違ったものとなった。滞在先は父の事務所の2階を住居とし一部屋使わせてもらったが、台所も玄関も共用であり、常にスタッフと顔を合わせるため大変なことも多かった。昼食も事務所で作り全員一緒に食べる。そのため、食生活からそれぞれの家庭のよもやま話、文化や習慣に至るまで、自宅に居ながらにして複数家庭のベトナム人に聞き取り調査やホームステイしている感覚であり、非常に興味深い滞在となった。研究調査以外では、週に一度大学でのベトナム語授業を継続して行い、また国際会議参加のためベトナム語での論文および発表原稿作成の特別授業も組んでいただき、日常会話から国際学会発表と幅広いベトナム語学習の機会を得られた。2008年7月から3カ月弱、社会科学院東北アジア研究センター主催の日本語教室の講師を週一回、一回2時間行った。同センターには、初めてベトナムに留学した1998年にベトナム語の授業を担当してくださった先生が勤務しており、その先生から是非にと頼まれたものだ。実際教壇に立つというのはこれが初めての経験であり、最初は不安で一杯であった。しかし受講生は全員社会科学院に所属する各研究機関の若手研究員の皆さんであり、教室内だけでなく一緒に食事に行ったりする中で研究面においてもお互いの悩みを共有したり、意見交換をして刺激を受けあったりと、ここで得られた経験や出会いは忘れられない。第3回ベトナム学国際会議でも顔を合わせ、お互い激励しあったものである。その中の一人がこの10月から東北大学に留学しており、日本でも交流が続いている。今回の留学で、忘れられない出来事の一つは、国営放送のテレビ番組に出演できたことである。日本の教育テレビにあたるチャンネルで、阮朝の公式行政文書「阮朝硃本」についての特集番組(30分番組2本)を作成することとなり、僭越ながら阮朝研究の外国人研究者代表としてインタビューを受けることになった。第一部は「阮朝硃本」の概要が紹介され、第二部はこの史料を所蔵している文書館の館長のインタビュー、2名のベトナム人研究者および1名の外国人研究者(私)による「阮朝硃本」の史料的価値についてのインタビューで構成されていた。私の映像は第2部の最後に3-4分間流された。この番組は同チャンネルで3回、その後ケーブルテレビも含めると5-6回再放送されたそうで、友人・知人の多くも偶然番組を見たとき連絡をもらった。がんばって研究している姿を、研究者以外の知り合いにも見てもらえたことはとてもうれしい経験であった。最後に、2008年11月に、松下幸之助氏の『人生談義』がベトナム語に翻訳され、出版された。私の松下国際財団からの留学期間中に、ベトナムで初めて松下幸之助氏の本が翻訳・出版されたことに特別なご縁を感じた。このご縁に心から感謝し、今回の留学で得られた成果や経験を胸に、今後ますます精進して研究を続けていこうという気持ちを新たにしている。